

鉄斎の器玩

— 売茶翁没後250年によせて —

2012年1月8日[日] — 3月18日[日]

前期 = 1月8日[日] — 2月12日[日]

後期 = 2月16日[木] — 3月18日[日]



66 清風書売茶式茶旗 (煎茶器具のうち)



18 郵箱 (煎茶器具のうち)



94 高遊外壳茶団 (部分)



54 徳家書売茶式器局



25 湯罐 23 湯杯 24 炉台 (煎茶器具のうち)

最後の文人と謳われる富岡鉄斎（1836～1924）は、万余におよぶ書画作品のほかに、「鉄斎の器玩」と呼ばれる工芸品を遺している。



日本の煎茶の祖と仰がれる売茶翁高遊外（1675～1763）は、茶を売って生計の資とし、清談をもってこころの糧とした。その清廉な生き方を慕って人々が集い、没後も精神と煎茶は多くの者に受け継がれた。鉄斎も若い頃より翁の高潔な風格を慕い、明治初めまで現存していた京都大仏瓦町の旧跡を訪れて「売茶翁が寓居旧趾に於て写く」と識語する作品（No.70、No.74）を遺し、また翁と交遊のあった伊藤若冲（1716～1800）や『近世畸人伝』の草案者である三熊思孝（1730～94）の図に拠って肖像を画き（No.83、84、85）、賛には『売茶翁偈語附・名公茶器銘』にある詩偈を好んで用いている。そして何より、翁自筆とされる「対客言志」一篇や「売茶八十翁」印（No.77）などの遺物を手に入れて、終生愛玩していた。

鉄斎の売茶翁への敬慕の念はこうした作品資料からも窺われるところであるが、とりわけ70歳以降から制作された煎茶道具に顕著に表れるようになる。当時京都大阪で活躍していた錚々たる名工たちや妻春子と合作した鉄斎の道具類については、自娛の楽しみであり、いわゆる文人趣味的な賞玩の対象と解されてきた。しかし近年、鉄斎自身が深くかかわった煎茶会において、実際に用いられたことが周辺資料からわかってきている。そこで鉄斎が晩年にかかわった売茶翁にちなむ三つの煎茶会を紹介して事績を明らかにするとともに、鉄斎の煎茶具が用いられた「場」について考えてみたい。

売茶翁150回忌辰 明治45年（1912）4月6日、泉州の奥喜太郎（号蔡倫 1851～1915）宅において売茶翁の150回忌辰を追悼する茶会が開催された。奥家は江戸時代から続く大阪岸和田の豪商で、その分家である喜太郎は鉄斎と交遊があり、茶を好んだ人物であったようだ。売茶翁の年忌茶会を催した経緯については現在のところ定かでないが、煎抹両茶席のほかに設えられた待合席（展観席）と献花席は鉄斎作品で構成され、さながら鉄斎の書画陳列会の様相であったという。岸和田実業新聞が伝えるところでは、鉄斎筆の売茶翁肖像、所用印36顆を捺した《賜楓書樓印譜》（No.91）、妻春子あるいは陶工三浦竹泉の手になる器物に鉄斎が絵付けをした茶器、箱書に「泉南の奥老人、茶を好み、煎抹両ながら嗜むの癖あり。余、因って売茶遊外翁の茶具を摸写して以て贈る」と識す《売茶翁茶具図》（布施美術館蔵 『鉄斎研究』49-26）、喜太郎の還暦祝いに鉄斎が贈った《松鶴群聚図》（久保徳記念美術館蔵 『鉄斎研究』71-11）などが会場を飾ったという。残念なことに、この頃鉄斎の随行をつとめていた息子の謙蔵（号桃華 1873～1918）が京都帝国大学文科大学講師の職にあり、満州に出張し不在であったため、鉄斎の臨席は能わなかった。かわりに愛蔵の《売茶翁対客言志卷》（No.77）や売茶翁八十賀詩巻が特別出品された。この茶会に対する鉄斎の関わりと思入れの深さが窺えよう。

幕末から明治にかけて「茗讌」と呼ばれる大規模な煎茶会が最盛期をむかえる。鉄斎も文人墨客と集って雅会を楽しみ、明治9年刊の『円山勝会図録』、明治41年刊の『東山茶会図録』などの茗讌図録に題字や跋を寄せている。一方、煎茶が普及一般化されると煎茶会は全国的に広がりを見せ、こうしたなかに奥喜太郎主催の売茶翁150回忌辰追悼茶会も位置づけられる。煎茶会において展観される書画文物は中国趣味が主流であり、その流れをくむ日本のものは、田能村竹田や青木木米をはじめとする煎茶に深く関わった文人たちの作品であった。いわゆる古物賞玩の場とは対峙する趣きを呈した新物によって構成される煎茶会の開催は、鉄斎の器玩制作と密接な関わりをもつようになってゆく。

売茶翁所持茶具の復元 大正7年（1918）5月22日、京都円山の平野屋において指物師中島菊斎（屋号秋古堂 1874～1935）主催による売茶翁の茶具を復元し、披露する煎茶会が開催された。案内状は下記のとおりである。

拝啓 前般富岡鉄斎先生より売茶翁茶器図一卷を恵与せられ候処、此の書は翁が旧蔵の茶器三十三件を、余夙夜写し兼葭堂梓に上したる稀有の珍書に候故、筐底に秘して独娛まんよりはと、指物は自ら其の式に仿

ひ陶、磁、銅の類は名工を煩はして摸造し、鉄斎先生には^{ろがん}^{すべ}^{ろがん}を始め凡ての器具に記せる文字を揮写し給へり。是に於て新たに売茶翁の茶器復現いたし候。乃ち自ら歡喜の意を表せんとして緑蔭眼に爽かなる円山に於て苦茗を煎じて一日の清閑を消し度、御散策旁御立寄可被下候。此段御案内申上候。(句読点筆者)

京都において祖父以来百年に及ぶ指物業を営む家に生まれた菊斎は、大正元年(1912)の《石図方盆》(No.3)を前後に、大正13年に鉄斎が89歳で逝去するまで多くの合作を遺している。大正4年には「近年、鉄斎翁之勸告に基づき、煎茶器を研究し又文房具之類を製造す。」と鉄斎筆の案内状にかかる展示会を催している。菊斎の精巧な指物に、鉄斎が美しい彩色で吉祥図様を施した《四君子絵桐茶壺》(No.10)、《松竹梅靈芝絵料紙文庫》(No.11)などが同年の年紀をもつ合作としてしられる。合作を重ねるうちに、研究熱心で自身の想いをくみ取ることに長けた菊斎に鉄斎は篤い信頼を寄せ、煎茶道具の典範ともされるべき『売茶翁茶器図』を贈ったのだろう。

さて、『売茶翁茶器図』とは、売茶翁と交友のあった木村兼葭堂(1736~1802)が翁所持の煎茶道具を写した冊子で、これを文政6年(1823)に後嗣の木村孔陽が池大雅の弟子青木夙夜に改写させて刊行した稀覯本である。本書の図に拠って、鉄斎は《売茶翁餘韻卷》(『鉄斎研究』71-5)や《売茶翁道具図》を画き、翁の茶具への憧れを絵画世界に表している。もちろん実証を重んじる鉄斎が、遺物が伝わる大阪の花月庵を訪ねて、茶具の実見をなしたことはいうまでもない。

売茶翁は死後、自身愛用の茶具類が俗人の手に渡って辱められるのをおそれ、宝暦5年(1775)81歳の時に^{せんか}煎壺「僊樂」を焼却した。この復元図を兼葭堂が試みたように、敬愛する翁の茶具を復元することは鉄斎にとって

翁の煎茶の精神性を具現化するものであり、こうした願いを実現したのが若き指物師の菊斎であった。期待に応じて制作されたのが《^{ろがん}煎壺》(No.31)、《^{けんすい}建水》(No.26)や《^{すみとり}炭斗》(No.63)等で、陶、磁、銅類は諸名工に依頼し、十七代雲林院宝山作《^{ちやしんこ}茶心壺》(No.19)、二代三浦竹泉作《^{ばいさおうせきずしほち}売茶翁旧跡図磁鉢》(No.21)、十代中川浄益作《^{どうろ}銅炉》(No.22)などのすべてに、鉄斎は「名公茶器銘」の銘文や売茶翁ゆかりの詩書画を揮毫した。今日、鉄斎の《煎茶皆具》(挿図)と称するようものが、大正7年の復元茶会において披露されたと推察されるが、制作年代が前後することから



[挿図] 煎茶皆具のうち

から現在の一具になったのは後世の取り合わせと考えられる。

こうした煎茶会の形式をとる展示会は、若い菊斎への鉄斎の奨励の意の表れであったが、京都画壇の重鎮である鉄斎を擁した会を催した菊斎に、同趣の茶会を提案する者が現れる。これに対して鉄斎は「足下は家業の精巧な者成れども世事には疎拙なり。又愚齋其の家業披露の為、茶会及び書画陳列は愚齋好まず…足下は家業の精巧品製造専心にして、余事に人々を煩す事は策の得たる者に非ず」とたしなめ、「無用の書画会は大嫌い」と一喝している(No.111)。学ぶことに熱心で、また志を同じくする人のために筆を揮うことを鉄斎は喜びとしたのである。

売茶翁供養茶会 大正13年(1924)6月15日、虎屋京都店主黒川正弘(号魁亭 1880~1948)主催になる売茶翁供養茶会が、翁ゆかりの京都宇治の萬福寺において催された。外設席の床を飾った鉄斎筆《^{ばいさおうせきずしほち}売茶翁高遊外像》(虎屋蔵・写真)の箱書には、「余の近隣の黒川魁亭氏、営業の暇に甚だ煎茶^{うそが}を嘯く。夙に売茶遊外翁の人となり慕いて、匠をして翁の茶具を摸造す。日を扨びて^{えら}黄檗山内に席を設け、^{おうぼく}売茶翁供養を営まんと欲し、余に翁の肖像を摸写せしむ。余、三熊思孝筆を摸し之を与う。此の像これ也。会すなわち六月十五日なり。(原文漢文)」と識されている。

この供養茶会には、喫茶、^{ふちや}普茶料理のほか、正弘母マサが担当する外設席が設えられたことが、参加者の一人である布施巻太郎に宛てた鉄斎の書簡（布施美術館蔵）からわかっており、会の趣向に鉄斎が深く関わっていたことが窺われる。そして茶会のために正弘が鉄斎の意に沿って新造した道具の一つに、売茶翁が茶店にかかげた旗がある。「高遊外式に仿い之を造る 黒川魁亭」と鉄斎が背面に墨書する《清風書売茶式大茶旗》(No.53)は、兼葭堂筆「売茶翁茶具図」に則って造られたもので、木村孔陽の刊行本を模した茶旗(No.66)とは異なる形式になる。また売茶翁が81歳の折りに焼き払った炉龕「僊窠」を復元した菊齋作の《僊窠書売茶式器局》(No.54)も、この時に造られたと推察される。鉄斎は売茶翁の茶具一つ一つに考証を重ね、できるだけ忠実に復元することを誘起して、それらと自身の作品を取り合わせた「場」を煎茶会に求め、売茶翁生誕250年の年を雅友とともに楽しんだのだろう。

なお、鉄斎が「拙者の愛弟子」と紹介し可愛がった正弘が、鉄斎を擁して催した茶会としてしられるのは、大正10年の黒川マサ（正弘母）喜寿御祝茶会、同12年の鉄斎翁米寿御祝茶会および虎屋茶寮開、そして翌13年の売茶翁供養茶会である。いずれの茶会にも趣向に合わせた書画と道具類が多く揮毫され、会場は鉄斎作品で彩られた。



[写真] 売茶翁供養茶会 於萬福寺
右から中島菊齋、布施巻太郎、松葉儀平、鉄斎、息謙蔵妻・とし子、黒川正弘（魁亭）、高田新助（探古堂）

売茶翁250回忌を記念して開催する本展では、翁をこよなく敬愛した鉄斎の器玩と書画によって構成された煎茶会の雰囲気をご覧いただければ幸いです。（柏木知子）

《出品目録》

[器 玩]

※すべて鉄斎の筆になる

番号	名 称	制 作 者	制作年		年齢	寸 法	員数	備 考
1	寿字陶鼎	初代 浅見五郎介	慶応3	1867	32	22.5×24.4×24.4	1口	煎茶皆具のうち
2	仿漢鼎式香炉	四代 高橋道八			60代	13.5×11.2× 8.0	1基	
3	石匱方盆	中島菊齋	大正1	1912	77	4.1×30.0×30.0	1枚	
4	竹石絵染付水注	四代 清水六兵衛	大正3	1914	79	17.1×19.8×11.9	1口	
5	菟道真景詩画器局	中島菊齋			70代	47.5×45.3×29.0	1基	
6	人物絵染付急須	四代 清水六兵衛			70代	7.6×10.5×11.8	1口	
7	煎茶碗	富岡春子			70代	各4.7× 6.0× 6.0	5客	
8	竹製聯				70代	各95.2×12.9	1対	
9	蟹絵炉屏	中島菊齋	大正4	1915	80	41.0×60.0×29.0	1隻	
10	四君子絵桐茶壺	中島菊齋	大正4	1915	80	各11.4×7.8× 7.8	1双	
11	松竹梅霊芝絵料紙文庫	中島菊齋	大正4	1915	80	硯箱：5.4×22.7×25.9 文庫：13.7×34.0×41.5	1組	
12	蘭絵手文庫	中島菊齋	大正4	1915	80	9.0×19.5×26.2	1合	
13	木製聯		大正4	1915	80	各85.5×18.0	1対	
14	円形茶壺	陶：二代 三浦竹泉 錫：二代 秦蔵六	大正5	1916	81	各10.0× 5.3× 5.3	1双	
15	松芝不老絵文台	中島菊齋	大正5	1916	81	10.3×57.5×35.8	1台	
16	藻魚図溜金滓盥	中島菊齋	大正5	1916	81	5.3×13.7×13.7	1口	
17	瓢杓	中島菊齋	大正5	1916	81	20.2× 4.5× 4.3	1本	煎茶皆具のうち
18	都籃	中島菊齋	大正5	1916	81	35.5×44.4×31.8	1基	
19	茶心壺	十七代 雲林院宝山	大正6	1917	82	8.2× 6.3× 6.3	1口	煎茶皆具のうち
20	通天煮茶詩画磁鉢	二代 三浦竹泉	大正6	1917	82	8.0× 8.5× 8.5	1口	

21	壳茶翁旧跡図磁鉢	二代 三浦竹泉	大正6	1917	82	9.7×20.0×20.0	1口	煎茶皆具のうち
22	銅炉	十代 中川浄益	大正6	1917	82	13.0×17.0×17.0	1基	煎茶皆具のうち
23	涼炉	十七代 雲林院宝山	大正6	1917	82	17.4×12.3×12.3	1基	煎茶皆具のうち
24	炉台	十七代 雲林院宝山	大正6	1917	82	1.7×14.7×14.7	1枚	煎茶皆具のうち
25	湯罐	十七代 雲林院宝山	大正6	1917	82	7.6×11.5×11.5	1口	煎茶皆具のうち
26	建水	中島菊齋	大正6	1917	82	17.3×16.2×14.9	1口	煎茶皆具のうち
27	建水	中島菊齋	大正6	1917	82	7.6×12.8×12.8	1口	煎茶皆具のうち
28	炉扇	中島菊齋	大正6	1917	82	24.0×13.8	1本	煎茶皆具のうち
29	菓子台	中島菊齋	大正6	1917	82	16.3×24.2×24.2	1台	煎茶皆具のうち
30	扇式罐坐	中島菊齋	大正7	1918	83	2.9×14.0×10.7	1枚	煎茶皆具のうち
31	炉龕	中島菊齋	大正7	1918	83	47.8×31.2×30.9	1基	煎茶皆具のうち
32	長瓢杓	中島菊齋	大正7	1918	83	長82.0 径10.2	1本	
33	茶托	中島菊齋	大正7	1918	83	各1.8×10.6×10.6	5客	煎茶皆具のうち
34	蝶絵溜箔薄桐香合	象彦製	大正7	1918	83	2.1× 8.0× 8.0	1合	
35	蝸牛廬図急須	二代 三浦竹泉	大正8	1919	84	7.0×10.2× 6.5	1口	
36	仿銅器式桐香炉	木器：中島菊齋 銀火舎：三代 秦蔵六	大正8	1919	84	7.2×10.2× 7.8	1基	
37	仿壳茶式煎茶碗 木米隠栖図竹茶碗筒	二代 三浦竹泉	大正8	1919	84	茶碗：各3.7×6.2×6.2 筒：11.0×7.7×7.7	6客 1口	
38	双寿千年絵染付煎茶碗	五代 清水六兵衛	大正9	1920	85	各4.5× 6.7× 6.7	5客	
39	富士山形香炉	初代 諏訪蘇山	大正9	1920	85頃	18.5×35.0×24.0	1基	
40	魁星閣図絵具皿	磁器：初代 諏訪蘇山 木器：中島菊齋	大正10	1921	86	23.0×15.5×15.5	1組	12枚重
41	魁星図賛絵具皿	磁器：初代 諏訪蘇山 木器：中島菊齋	大正10	1921	86	19.0×15.5×15.5	1組	11枚重
42	高遊外詩画染付菓子鉢	初代 諏訪蘇山	大正10	1921	86	8.8×18.4×18.4	1口	
43	清風書壳茶式茶旗		大正10	1921	86	53.0×44.5	1枚	
44	炭斗		大正10	1921	86	19.0×21.5×20.0	1口	
45	瓢絵炉屏		大正10	1921	86	29.0×93.0×93.0	1隻	
46	扇式菓子器	中島菊齋	大正11	1922	87	7.5×32.5×27.4	1口	
47	白泥湯罐	初代 諏訪蘇山	大正11	1922	87	13.2×13.5×11.6	1口	
48	亀絵桐雕盆	中島菊齋	大正12	1923	88	2.5×27.5×47.0	1枚	
49	四君子絵桐印筆筒	中島菊齋	大正12	1923	88	39.5×40.8×28.5	1基	
50	青華香合	二代 諏訪蘇山	大正12	1923	88	3.2× 6.7× 6.7	1合	
51	汲桶挿花器		大正12	1923	88	26.9×19.5×19.5	1口	
52	鴨川眺望図煎茶椀	富岡春子	大正12	1923	88	各4.3× 7.4× 7.4	5客	
53	清風書壳茶式大茶旗		大正13	1924	89	176.0×48.0	1流	
54	徳窠書壳茶式器局	中島菊齋	大正13	1924	89	55.6×26.7×27.6	1基	
55	宝珠絵植	中島菊齋	大正13	1924	89	6.6× 7.7×14.4	1個	
56	仿銅器式桐香炉	中島菊齋	大正13	1924	89	24.0×25.0×20.0	1基	
57	蘭絵香盆	中島菊齋	大正13	1924	89	4.2×36.0×47.5	1枚	
58	急須	十七代 雲林院宝山		80代		8.9× 7.7× 7.7	1口	煎茶皆具のうち
59	煎茶碗	十七代 雲林院宝山		80代		各5.0× 6.2× 6.2	5客	煎茶皆具のうち
60	茶心壺	十七代 雲林院宝山		80代		8.4× 6.4× 6.4	1口	煎茶皆具のうち
61	茶量	中島菊齋		80代		17.7× 4.5× 1.8	1基	煎茶皆具のうち
62	滓盃	中島菊齋		80代		2.1×10.8×10.8	1口	煎茶皆具のうち
63	炭斗	中島菊齋		80代		17.2×20.0×18.9	1口	煎茶皆具のうち
64	巾筒	初代 三浦竹泉		80代		7.1× 3.2× 3.2	1口	煎茶皆具のうち
65	香合	富岡鉄齋		80代		5.6× 4.9× 4.6	1合	煎茶皆具のうち
66	清風書壳茶式茶旗	富岡鉄齋		80代		53.0×40.5	1枚	煎茶皆具のうち

[遺愛品]

番号	名 称	制 作 者	制作年	年齢	寸 法	員数	備 考
67	青磁筆洗	初代 諏訪蘇山	大正10	1921	13.6×16.7×24.7	1口	鉄斎箱(86歳)
68	染茶碗	二代 諏訪蘇山	大正		6.2×14.0×14.0	1口	鉄斎箱(89歳)
69	奇竹挿花器				13.6×24.0×20.3	1口	鉄斎箱(89歳)

[書 画]

番号	名 称	制作年	年齢	寸 法	材 質	員 数	備 考
70	名花十友図	慶応2	1866	31	122.0×50.5	1幅	
71	愜趣帖・清娛帖	慶応3	1867	32	各8.8×13.4	2帖	
72	間有趣帖	慶応4	1868	33	各13.5×19.8	1帖	
73	書聯			30代	各124.0×12.0	対幅	

74	谿巒秋色図			30代	119.2×43.0	絹本淡彩	1幅	
75	我愛吾廬図	明治10	1877	42	163.8×52.2	紙本着色	1幅	
76	通天紅葉図	明治15	1882	47	138.4×55.0	絹本着色	1幅	
77	売茶翁对客言志卷 附：「売茶八十翁」印	明治17	1884	49	26.7×360.0	紙本墨書・墨画	1巻	売茶翁高遊外筆 山中信天翁題字 売茶翁所用
78	煎茶聯	江戸			2.8×2.8×3.3	漆	1顆	
79	陸羽像			40代	各130.8×16.3	紙本淡彩	対幅	
80	山上憶良貧窮問答歌図	明治24	1891	56	130.5×42.2	紙本墨画	1幅	
81	梅山秋葉図			50代	33.5×125.0	絹本着色	1面	
82	遺像在此帖			50代	各18.5×13.0	紙本着色	1帖	
83	売茶翁像			50代	110.5×43.1	絹本墨画	1幅	売茶翁高遊外書貼付
84	売茶翁像			50代	70.3×49.7	紙本淡彩	1幅	
85	売茶翁像			50代	70.9×51.2	紙本墨画	1幅	
86	蔬菜図			60代	27.7×146.8	絹本着色	1巻	
87	蓬萊僊境図			60代	139.3×42.9	絹本着色	1幅	
88	松芝剛勁図	明治38	1905	70	209.8×71.1	紙本着色	1幅	
89	十年研鍊帖	明治40	1907	72	各28.0×41.4	紙本着色	1帖	
90	梅溪清隱図	明治43	1910	75	139.3×39.9	絹本着色	1幅	
91	賜楓書楼印譜	明治44	1911	76	各26.8×15.4	紙本鈐印 墨書	1冊	附属書付
92	新整開園図	大正3	1914	79	148.3×42.0	絹本着色	1幅	
93	僊宮煉丹図			70代	28.0×34.2	絹本着色	1面	
94	高遊外売茶図			70代	132.2×42.2	絹本着色	1幅	
95	迂癖画談			70代	各24.5×38.8	紙本墨画	2帖のうち	
96	墨痴筆越			70代	各22.2×32.0	紙本墨画・着色	1帖	
97	室内裝飾注意一端書			70代	30.4×102.9	紙本墨書・墨画	1巻	
98	梅山幽趣図	大正4	1915	80	130.0×42.0	絹本着色	1幅	
99	遊山斲水図	大正5	1916	81	146.2×39.0	紙本淡彩	1幅	
100	紙雜図	大正5	1916	81	36.2×6.0	紙本着色	1幅(短冊)	
101	印癖巻	大正8	1919	84	31.1×132.4	紙本鈐印 墨書	1巻	大正12年再跋
102	模花山茶水僊華図	大正9	1920	85	47.0×57.5	絹本着色	1幅	
103	歳朝図	大正11	1922	87	132.6×32.4	紙本淡彩	1幅	
104	魁星閣図	大正11	1922	87	37.9×52.4	紙本墨画	1幅	
105	陸茶僊品水図	大正11	1922	87	133.0×32.4	紙本淡彩	1幅	
106	松風蘿月書	大正12	1923	88	31.5×126.7	紙本墨書	1面	
107	絵島図・煎茶図	大正13	1924	89	各65.8×20.6	紙本墨画	対幅	
108	君子清遊図	大正13	1924	89	144.5×40.5	紙本淡彩	1幅	
109	墨龍図	大正13	1924	89	16.3×53.0	紙本墨画	1面(扇面)	
110	売茶翁詩巻			80代	11.0×39.0	紙本墨書	1巻	煎茶皆具のうち

[書簡]

番号	名称	制作年	年齢	寸法	材質	員数	備考
111	中島菊齋宛書簡		80代	17.0×51.5	紙本墨書	1巻	
112	中島菊齋宛書簡		80代	各151.5×141.0	紙本墨書	2曲1双	貼交屏風
113	黒川正弘(魁亭)宛書簡		80代	24.2×594.4	紙本墨書	1巻	12通のうち
114	黒川正弘(魁亭)宛書簡		80代	17.3×44.5	紙本墨書	1面	

・出品作品は期間中下記の通り2回にかけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。
前期 1月8日(日)～2月12日(日) 後期 2月16日(日)～3月18日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
1月21日、2月4日・25日、3月10日 各土曜日の午後1時30分より

・次回展覧会 「鉄斎 一水墨神韻一」
平成24年4月3日(火)～6月10日(日)

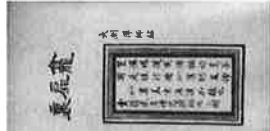
清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>

※ 器玩はすべて鉄産筆になる。

54 僊窠書壳茶式器局
中島菊齋作



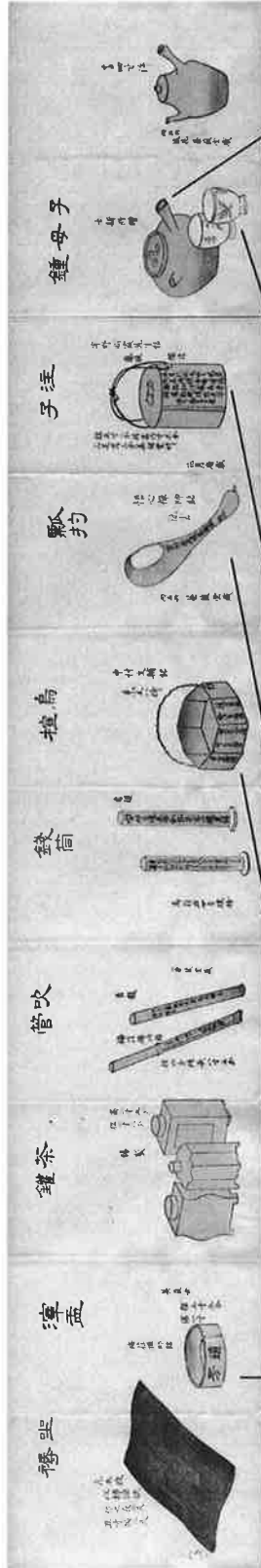
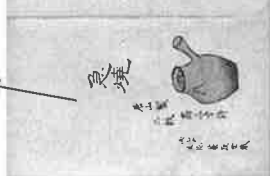
18 都盤 中島菊齋作



22 銅炉
十代中川浄益作



58 急須
十七代雲林院宝山作



62 鑿盃
中島菊齋作



63 炭斗
中島菊齋作



17 瓢杓
中島菊齋作



59 煎茶碗
十七代雲林院宝山作



25 湯罐
十七代雲林院宝山作

十七代雲林院宝山作



煎茶翁高遊外

(一六七五—一七六三)

江戸時代の黄蘗僧。煎茶道の始祖として知られる。肥前迹池(佐賀県)生まれ。本名は柴山元昭、幼名は菊泉。法名は月海。

選俗後、高遊外と名乗って京の街中で煎茶を売り、茶禪一致を唱えて煎茶と禪の興隆につとめた。自由に超俗的な言行は多くの文人墨客に影響を与えた。

宝暦五年(一七五五)、八十一歳で売茶業を廃業、愛用の茶道具も焼却する。この時、「私の死後、世間の俗物の手に渡り辱められたら、お前たちは私を恨むだろう。だから火葬にしてやろう」と禪の極地に立った擬人化を行つた「塵棄焼却の語」を遺している。以後は揮毫により生計を立て、宝暦十二年七月十六日、八十九歳で逝去。



古遊翁高遊外二十二年... 清風書壳式茶旗



27 建水 中島菊齋作

60 茶心壺 十七代雲林院宝山作

66 清風書壳式茶旗 富岡鉄齋作